

「僕を追って夏が来た」

春を後にして一人駆けてく

切りつける日差しの映像はいつも

外付けのハードディスクに保存されたみたいな記憶

生活の響く音は隣にいるほど聞こえなくて

離れたら離れたで目が霞む

空想の中を揺蕩うばかりが

ただしいなつの待ち方だと思っていた

だけど無菌室から見える夏は歪んでて

通り過ぎたまどろみの先には何回目かの陽炎が

足元数センチはさみしがっている砂と熱の層

僕の足首をやわらかく削る

求めているものはそれだけど

絶望は希望よりちよつと水を弾く

もう「僕を追ってきた」とは思っなくなって

追うのではなくて巡ると気づく

熱に背を向けて飛びだした

僕のことばは宙づりに

でももうすぐにあそこにかきや

蜃気楼のためにいきる

傲慢でうつくしい暇つぶし